



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

冬 夏 TOUKA SEISEI 青 々

1 龍馬と長州の関係

一般的に長州藩と呼ばれるのは、周防・長門を治める毛利氏の領分のごとで、本藩である萩藩を筆頭に、支藩の長府藩、清末藩、徳山藩、岩国領を含めた総称である。その長州の中でも、長府藩に含まれる下関は、物資や情報の中継点であると同時に、交通の要衝でもあるため、非常に重要な場所、龍馬もここに拠点を求めた。

本展では、龍馬と長府藩の人々との交流に焦点を当て、龍馬にとって長府藩がどのような存在だったのかを紹介する。

龍馬は慶応元(1865)年5月に太宰府を訪れ、三条実美や萩藩士・小田村素太郎らと対面し、薩長同盟に向けて動き始めた。中岡慎太郎ら土佐脱藩浪士と協力し、下関で薩摩藩の西郷吉之助と萩藩の木戸孝允の対面を画策したが不調となり、あらためて翌年1月に京都での対面を手配し成功させた。



(右から)伊藤九三・坂本龍馬・ほか1人
個人所蔵・下関市立歴史博物館寄託

2 長府藩の人々との交流

長府藩の人々とは、印藤(いんどう)半(はん)が最も早く龍馬と知り合ったと考えられている。印藤は龍馬より4歳年上で、長府藩主・毛利元周からの信任篤く、格式は馬廻格で長府藩報国隊の軍監も務めた。維新後は豊永長吉と名を改め、商人となったことから分かるように、経済に明るい人物であったため、龍馬とは気が合ったものと思われる。

慶応元(1865)年5月以降、龍馬は薩長同盟の周旋に加わり、下関に拠点を置き、本陣を経営する伊藤九三の世話になった。同年10月12日の印藤宛書簡では、すでに伊藤と親しく酒を酌み交わす様子が記載されているため、伊藤家に

はそれ以前から出入りしていたよう



下関市立歴史博物館所蔵
印藤半

令和6年度企画展 「龍馬と長府藩」展

会期 令和6年7月5日(金)～同年9月1日(日) 会期中無休
講演会 同年8月3日(土) 13時半～15時
講師 古城春樹氏(下関市立歴史博物館館長)
展示解説 ①7月27日(土) 14時～ ②8月3日(土) 11時～

次に、三吉慎蔵との出会いは、これも印藤宛書簡に登場する。龍馬は、薩長の会談を見届けるために京都へ行く際「長府藩から誰か一人同行する人を紹介してほしい」と依頼した。その結果、選ばれたのが三吉慎蔵だった。三吉は文武両道で非常に誠実な人柄、長府藩主からの信任も篤く、情報収集を目的として龍馬に同行した。海援隊のいろは丸事件が起こった際、龍馬は三吉に「自分の身に万一のことがあれば、お龍を頼む」という遺言書のような手紙を送るほど信頼していた。



三吉慎蔵
下関市立歴史博物館所蔵

長府藩の印藤・伊藤・三吉の3人は、龍馬が心から信頼した友人である。そのため、3人に宛てた手紙は、家族宛ての手紙や、木戸孝允、後藤家二郎など同志宛ての手紙と一味違って、自然体の龍馬を感じる事ができる。龍馬にとって長府藩は、重要な拠点であると同時に、居心地の良い場所だったといえる。

三浦夏樹

「龍馬記念館の蔵出し

—学芸員セレクション—展を振り返って

令和6年度最初の企画展「龍馬記念館の蔵出し 学芸員セレクション展」は、6月25日で閉展しました。本展は、初展示となる資料や展示の機会の少ない資料を中心に約30点をご紹介します。そのなかで、当館によくお越しのVIPターの方も、あまり目にしたことのない資料も並んでいたかと思えます。

超レアもの？

一度展示した後、なかなか展示の機会がなかった資料に「京都土佐藩邸史料」があります。京都にあった土佐藩邸の公文書類574点を平成22年に高知県が購入し、当館に収蔵されたものです。明治維新後、全国の藩邸はその役目を終え、屋敷は転用され、道具類も売却、多くの藩邸史料も失われたといわれます。その状況で500点以上の文書がまとまって、かつ良好な状態で残っていることは、貴重かつ

重要なことといえます。内容は、土佐藩の法令や人事、京都警衛、軍事関係、藩士の私信…と多岐にわたりますが、本展では少し面白い史料を展示しました。

操練のある日、複数の足軽たちが同日付けで提出した「欠席届」です。「用事がある」「腹痛」「目の病気」など、同日に重なるものは「本当かな？」と疑いたくなりま

す。この資料から、教科書では知ることのない、リアルな「江戸時代」を感じることができたのではないのでしょうか。では、この企画展の意図は、そういった「レア資料」の披露？—そうともいえませんが、必ずしも、それだけが企画意図ではありません。



「土佐藩京都藩邸史料」より6点展示しました

「博物館」とは？

当館は「坂本龍馬記念」館なので、坂本龍馬に関する物、龍馬と同時代の土佐に関するもの等、「龍馬および龍馬が生きた時代」が収集のポイントになります。そうした資料を収集する方法も、「寄贈(いただく)」「寄託(預かる)」「購入(買う)」「移管(管理施設を替える)」の4つに大別されます(当館だけでなく一般的な博物館資料の収集の方法です)。本展では、収蔵の経緯ごとに資料を紹介し、当館がどういったかたちでコレクションを構成してきたかをご紹介します。

そうやって、収蔵された資料は、最適な温度、湿度に設定され、作業時以外は消灯され、防火、防虫にも気を配った収蔵庫で保管されます。資料は、異状があっても自ら「痛いよう」「しんどいよう」と声をあげることではできませんから、学芸員が定期的に資料のケアをする必要があります。

歴史を経た資料は、私たちに

「過去」を教えてください。それがなくなってしまうと、わからなくなってしまうこともたくさんあります。過去を知ることが、未来を知ること、とよく言われます。未来を考えるためにも、過去を伝えてくれる資料を保存するのは大切なことなのです。様々なかたちで集まった資料を傷まないよう保管し、過去から未来へ、資料を伝えていくことこそ、博物館の使命なのです。そうした「博物館の使命」を伝えたい、ということも本展の企画意図のひとつです。ご覧になってくださった皆様に、伝わっていただければ幸いです。



多彩な資料が並びました(会場全体)

河村章代

龍馬像96thイベント & 月いちワークショップ

桂浜に立つ坂本龍馬像は、5月27日で建立から96周年を迎えました。今年は龍馬像前の広場で記念式典も開催され、当館・館長より祝辞をのべさせていただきました。桂浜公園のテナント様や桂浜水族館様、近隣の幼稚園・保育園の園児の皆様も出席され、100周年にむけて桂浜一体となり大変盛り上がりました。



96周年の特別展示として、「龍馬銅像建立物語展」を海の見える・ぎゅらりいで開催しました。昨年の特別展「花と歴史の爛漫土佐」の際に展示した、司馬遼太郎氏が龍馬にあてたメッセージ屏風を中心に、龍馬像建立にむけて奔走した入交好保氏や、銅像制作者である本山白雲氏のエピソードなどを紹介しています。メッセージ屏風以外は、海の見える・ぎゅらりいでしばらく展示しておりますので、ご来館の際は是非ご覧ください。



関連イベントとして、いの町の草流舎さまを講師にお招きした「龍馬だるま 絵付けワークショップ」も開催しました。草流舎さまは、土佐和紙と土佐漆喰を使用した張り子人形を制作・販売されています。今回は、だるまの張り子をご用意いただき、参加者の皆さまが龍馬の顔を絵付けするワークショップを行いました。イラストなどを参考に、皆さん思い思いの龍馬を描かれていました。

また、今年度から新たにはじめた取り組みを2つご紹介します。まずは「りょうまとアソボウ！ マナボウ！ 月いちワークショップ」です。龍馬をテーマにしたワークショップを通して、遊びや体験、学びの場として楽しんでいただけるように、毎月1回日曜日（予定）に開催します。7月28日は「オリジナルキーホルダーづくり」、8月25日は「はじめての筆体験」です。大人も楽しんでいただけるワークショップですので、ご興味のある方は是非ご参加ください。

2つめは、LINE公式アカウントです。前回の飛騰でも当館のSNSについてご紹介しましたが、新たにLINEの「坂本龍馬記念館公式アカウント」を開設しました。企画展やイベント情報のご案内などを配信予定です。お友だち追加いただくと、一般の入館料が20パーセントオフになる割引クーポンも配信しています。

登録はこちらから/



坂本龍馬記念館
公式LINEアカウント

「龍馬記念館の蔵出し-学芸員セレクション-」展が無事に終了し、7月からは「龍馬と長府藩」展がはじまります。企画展とあわせて、昨年も開催したイベント「りょうま館の夏休み」も開催します。今年の夏も、皆さまのご来館をお待ちしております！

竹田 綾

坂本龍馬像建立96周年にあたって

さる5月25日に桂浜において「坂本龍馬像生誕祭」が(株)はりま家様の主催で開催されました。

坂本龍馬像は本年5月27日に建立から96周年を迎えました。建立のための募金活動は、大正15(1926)年8月にスタートされています。募金活動のきっかけは、後に本県の実業家としても活躍された入交好保氏をはじめ、当時4人の大学生が、「龍馬は維新史上もっと高く評価されるべきだが、然るに歴史の読本には出てこない。けしからん、これが銅像建設の根本趣旨である」と入交さんが回想(「土佐史談」170号 坂本龍馬生誕150年記念特集号 土佐史談会刊行より)されています。

そしてこの活動には、本県の土佐の交通王の野村茂久馬氏、龍馬の盟友で宮内大臣を務めた田中光顕氏、肖像彫刻の第一人者の本山白雲氏たちをはじめ、スター俳優の阪東妻三郎氏ら県内外の数多くの方々のご支援をいただいています。

入交氏は、「中学時代に高知市本町の藤本写真館で額に入ったあの銅像の原型になった姿を見て、今のことでカッコイイと思うた」とも述べ(「忘れ得ぬ人びと」入交好保氏著 高知新聞社刊より)されています。

龍馬は33年の短い生涯でしたが、諸外国が日本との国交を求めて、巨大な軍艦ではるばるやってきたのを目の当たりにします。幕末は、徳川幕府と土佐藩をはじめ26もの大名に分かれた二重構造の政

権、いわゆる幕藩体制でしたので、政治・経済・外交・防衛はまちまち。日本は長らく外国と殆ど交流しない「鎖国政策」でしたから、外国交渉のハウツーにも乏しく、交渉は難渋しました。これからのようにして諸外国に立ち向かっていけばいいのか、という大きな難題に直面します。

30歳代の若き龍馬は、この窮地を救うための大仕事に挑みます。龍馬は幕藩体制の限界を悟り、一刻も早く、政治・経済・外交・防衛の面で、外国に並び立つような先進国家をつくらねばと、「サムライ政権」から「近代政権」への転回という、日本立て直しの「新国家」を構想します。

そして、その先駆けとなつて、幕府や朝廷といった枠にとらわれることなく、現代のような二院制の議会を設けて日本を支える、そのような近代政権の組み立てに、暗殺されるまで全国の同志とともに献身しました。

入交さんから銅像建立に関わられた先人の皆さまは、あたかも現代を見通していたかのような龍馬の慧眼を理解されていたのだろうと思います。だからこそ、わずか2年足らずの期間で、銅像建立を成し遂げられたのだと思います。先人の皆さまにも敬服をするばかりです。

桂浜の坂本龍馬像は、このような龍馬の躍動と、銅像建立の息吹を伝え続けてくれていますので、先々にわたつて受け継いでいかなければと、このように思っています。

〈坂本龍馬記念館×星ふるヴィレッジTENGU×高知新聞観光コラボツアー〉のお知らせ

「星ふるヴィレッジTENGU×幕末土佐の史跡を辿る旅」1泊2日

龍馬誕生の天保6年(1835)、夜空にはハレー彗星が輝いていました。

星ふるヴィレッジTENGU「星の案内人」協力のもと、坂本龍馬にまつわる夜空のものがたりを、プラネタリウムで特別上映します。本ツアーのために制作されたプラネタリウム作品と当館学芸員の解説をお楽しみください。

また、10月23日から開催の企画展「河田小龍生誕200年-龍馬に世界を教えた男-」の学芸員による特別展示解説と、「河田小龍 ふすま絵」見学も実施いたします。

日程：令和6年10月26日(土)～27日(日) 旅行代金26,600円～

お申込み・お問い合わせは、高知新聞観光(088-825-4334)まで
片岡 愛華

高知新聞
観光HPはこちら



企画協力：株式会社五藤光学研究所

新職員紹介



安岡達仁

今年4月より高知県立坂本龍馬記念館に学芸員として勤務しております、安岡達仁と申します。本県南国市で生まれ育ち、大学・大学院時代は龍馬ともゆかりが深い京都で過ごしました。京都時代には、東山にある坂本龍馬・中岡慎太郎・藤吉の墓所へ何度も足を運び、そこから彼らが今も眺め続けている、市内を一望する景色を眺めたことが良い思い出です。このたび9年ぶりに高知に戻り、龍馬、また故郷である土佐の歴史に携わることになり、大変嬉しく思っております。まだまだ未熟者ではございますが、精一杯努めてまいりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

龍馬の手紙

23

私一人にて五百人や
七百人お引て天下
の御為するより、廿
四万石を引て天下国
家の御為致すが甚
よろしく、...

(慶応三年六月二十四日坂本乙女・春猪宛)

龍馬は生涯で二度、土佐藩を脱藩している。文久二年(1862)三月に一度目の脱藩、翌三年二月には幕臣で師匠でもある勝海舟の助言で脱藩の罪を許された。しかし同年十二月に藩から龍馬に帰国が命じられ、これに対して勝から帰国猶予願が出されるも、藩側が受け取りを拒否したことで、事実上二度目の脱藩となった。このような経歴から、龍馬は「土佐藩」という枠組みに縛られることなく(土佐藩とは距離を取って)、自由に活動したというイメージが広く普及している。

一方、龍馬にとって怒涛の一年となった慶応三年(1867)、一月末から複数回にわたって、土佐藩参政後藤象二郎と長崎で会談し、四月には正式に藩から脱藩の罪が許され、海援隊長に任じられた。以後、十一月に暗殺されるまで、龍馬は形式上、「土佐藩士」として活動した。いわゆる「船中八策」や薩土盟約といったよく知られる龍馬の仕事も「土佐藩士」として成したものである。

冒頭にあげた書簡の一節に戻りたい。「廿四万石」、つまり土佐藩を率いて「天下国家」のために奔走する、と龍馬は言う。土佐に住む姉・姪宛であるから、自らと藩の関係を少々大袈裟に記したという面はあるが、それを差し引いても「土佐藩士」としての龍馬の自負を窺わせる言葉である。

龍馬一度目の脱藩は、内部抗争に明け暮れる当時の土佐藩の在り様(その最たる例が吉田東洋らと土佐勤王党の対立)が、彼にはあき足らなく感じられたことが理由の一つに挙げられる。そこから足掛け五年、龍馬はこの年の一月、木戸孝允に土佐藩の様子を「夜の明候気色」と伝えている。故郷土佐もいよいよ「天下国家」を担える組織に成長したのだな、龍馬の心にはこうした誇らしげな思いが去来していたのではないだろうか。

安岡達仁

?

Q&A

No.8

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

Q. 館内での撮影はできますか?

A. 多くの場所が撮影可能ですが、撮影をご遠慮いただきたい場所もあります。

坂本龍馬記念館に来館されるお客様からよく、「館内での撮影はできますか」というご質問を受けることがあります。

撮影をご遠慮いただいているのは、新館では、撮影できない作品を展示している場合の「企画展示室」、本館では、地下2階「幕末写真館」の龍馬の立位写真以外の写真です。

また、その他にフラッシュと自撮り棒、三脚の使用もご遠慮いただいています。

記念館は、龍馬に関する資料を見ることはもちろん、屋上や本館「海の見えるぎやらりい」から眺望できる青く美しい太平洋、周囲を囲む緑豊かな木々、四季折々の草花といった高知ならではの自然の魅力を併せて楽しむことができる施設です。

撮影についてご注意いただきたいことはありますが、館内外には数多くのフォトスポットがありますので、この夏の旅の思い出づくりにぜひ当館にお越しください。

松本友

[撮影可能なフォトスポット]



本館2階 坂本龍馬フィギュア



本館地下2階 幕末写真館

◆最終回のご挨拶

館職員がリレーで書き継いできました「Q&A」は多く寄せられるご質問を一通り取り上げましたので、今号で最終回とします。長らくのご愛読、ありがとうございました。



後世の人間が歴史人物を評価する際に、彼は英雄であった、或いは彼は非英雄（いわゆるアンチヒーロー）であった、などと語るものが存外多い印象がある。特に、戦国時代や幕末など勢力の対立が顕著であり時代が大きく動く局面においては、歴史人物が英雄や非英雄として取りあげられがちである。他方で、果たしてこれらが客観的な評価なのかどうか、これについて、私自身が以前から関心のある井伊直弼を取り上げて考えてみたい。

井伊直弼について

井伊直弼は、近江国にある彦根藩の16代藩主であり、周知の通り後に大老となる人物である。14男として生まれた直弼が家督を継ぐ可能性は極めて低かったが、兄の急死などにより15代藩主直亮の世子となり、嘉永三（1850）年十一月二十一日に彦根藩井伊家の家督を相続する。直弼の業績として有名であるのは、安政五（1858）年の日米修好通商条約調印や安政の大獄であり、攘夷派と対立する強硬派のイメージが強いが、近年の研究では公武合体を推進した人物として再評価がなされている。

井伊直弼の人物像

直弼についてどちらかというと非英雄のイメージを思い浮かべる理由としては2つ考えられる。1つは、

天皇の勅許を得ずに日米修好通商条約を調印したことである。実際に教科書でも「調印を断行した」ことが記されており、尊王思想が高まる中で天皇と対立する人物として捉えられているのである。2つめは、これに伴う安政の大獄の実施にある。違勅調印が天皇や尊攘派の志士からの強い批判を招いた一方で、直弼はこれに対し強硬な態度で処罰を行ったため、思想が異なる人々を次々に弾圧した人物として捉えられているのである。なお、安政の大獄の結果、尊攘派の更なる反発を招き、万延元（1860）年に直弼は桜田門外で暗殺された。

以上のようなイメージが直弼に対しては形成されているが、これらが天皇や尊攘派の志士から見た人物像・史観であることを忘れてはならない。たしかに、天皇の立場からしたら直弼は天皇や尊攘派の公家の意見に耳を貸さない人物であったのかもしれないし、弾圧を受けた尊攘派の志士にしてみれば強硬手段を顧みない圧制者であったのかもしれない。しかしながら、直弼自身や幕府官僚の立場から考えてみると、直弼をそうした人物であると一概には言えないのである。

まず、不勅許での条約調印に対して直弼は最後まで否定的であった点を抑えておきたい。これについては、直弼が幼い頃から国学を学んでおり、故に皇国に対する意識が強かったことが背景にあると考えられている。

直弼は最悪の場合は調印を許可するとしていたが、基本的には勅許が得られるまでは調印を延引するようにしていた。ただし、この発言は実際に交渉を行っていた幕府官僚の立場からするといわば言質のようなものとなってしまう、結果として直弼は矢面に立たされてしまったとしたか言いようがない。また、安政の大獄に関して、これは水戸藩への密勅降下を契機として行われたものであるが、幕府官僚の立場からしたら無理もないことである。天皇から一大名への密勅は江戸時代における支配機構のあり方から逸脱する行為にほかならず、幕府官僚としてはこれを見過ごすわけにはいかなかったのである。その矢面に立った直弼はある意味では幕府の権威を失墜させないためにも必要な決断をしたのだと言える。ただし、これについても幕府官僚側から見た人物像・史観であることを忘れてはならない。

坂本龍馬の人物像

これまでは井伊直弼について述べてきたが、逆に英雄的イメージを思い浮かべることが多い坂本龍馬についてはどう考えられるのだろうか。龍馬の業績とされる薩長同盟や大政奉還などが近代国家形成の一端を担った、という評価がなされ、龍馬は英雄として語られる。他方、これについても見方を変えてみると、長

州征伐を行う当事者であった幕府に

してみれば、薩長の結託は非常に迷惑であったと考えられるし、会津藩にしてみても仲間であったはずの薩摩藩が薩長同盟により敵になってしまったわけであり、このように立場によっては捉え方が異なるのである。もともと、龍馬は常に陰の立役者の役回りでその功績は公式記録には残りにくい。そのため、そもそも英雄・非英雄として論じることが難しいが、同時代の人たちから高く評価されていることを考えるとやはりただの人ではないだろう。

このように、歴史上の人物については、評価の視点により見え方が180度異なってくるので、故に英雄・非英雄というようにひと括りにすることは難しいのである。視点によっては英雄にも非英雄にもなり得るその点について言えば英雄と非英雄は表裏の関係にもなるのである。



肉亭夏良作「白虎隊英勇鑑」
明治初期、白虎隊の隊士らの最期を英雄と題して描いたもの

ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。

今回は、以前ご紹介させていただいた商品ですが、「龍馬Tシャツ」に新色が追加されましたので、ご紹介させていただきます。また、当館HPのミュージアムショップ (<https://ryoma-kinenkan.jp/shop/>) のご利用方法についてご紹介させていただきます。

「龍馬Tシャツ」新色が追加されました！

この商品は長年に渡り高い人気を誇っている定番商品です。記念館オリジナルTシャツとなっており、ここでしか買えない限定品です。

生地は5.6オンスの綿100%。デザインは2種類。表面デザインの「龍馬と船」がブラック、バーガンディ、スレート、シティグリーン、サンドカーキ〈新色〉、サックス〈新色〉の6色。裏面デザインの「龍馬と地図」がチャコール、トロピカルピンク、ミントグリーンの3色です。サイズは、S、M、L、XLの4種類。タグには、「高知県立坂本龍馬記念館」、左袖には当館のロゴマークの刺繍をあつらえています。価格は税込2,800円です。数に限りがございますので、完売となる場合もございますが、通信販売でもご購入可能です。



ミュージアムショップ(通信販売)のご利用方法

当館HP内のミュージアムショップ (<https://ryoma-kinenkan.jp/shop/>) では、通信販売で一部の商品をご購入いただけますので、ご利用方法を紹介します。

まず、商品紹介ページをご覧ください「送料確認はコチラ」ボタンを押して、ご購入をご検討いただく商品についてお問合せください。次に表示されるページで、購入希望の商品と購入数を選択し「カートに追加」ボタンを押してから、ページの下に移動し、入力フォームに必要事項を入力の上「送信内容確認」ボタンを押してください。次に表示されるページで、送信内容にお間違いなければ、「送信する」ボタンを押してください。後程、当館宛にメールが届きますので、送信内容を確認し、送料や振込先口座番号、ご購入方法を記載したメールをお送りします。

お問合せいただいた商品をご購入いただける場合には、郵便局に備え付けの「郵便振替用紙(振込手数料別途必要)」にてお振込ください。当方にて入金確認後(入金から3日~7日程かかる場合があります)に商品発送いたします。店頭同時販売につき、完売となってしまう場合もございますが、ぜひ一度ご覧になってみてください。

渡辺 曜子

■「海見える・ぎゃらりい」

「海見える・ぎゃらりい」からは果てしなく続く太平洋を一望できます。視線を右手（西）に移すと、桂浜の西浜にあたる白い砂浜が緩やかな弧を描きながら続き、その先にはリアス式海岸をもつことで知られる横浪半島もはっきりと見ることができます（写真1）。目線を近くに戻すと、テラスの下には松の木が生い茂っており（写真2）、海岸線を走る県道（黒潮ライン）に沿って青々とした松の並木が続いていることに気が付きます。黒潮ラインを車で通ると、右手に松並木、左手に太平洋を間近で眺めることができ、爽快な気分になれます（スピードの出しすぎやよそ見運転にはご注意ください）。



記念館から西を眺める（反射等の都合で屋上から撮影） 写真1

松は万葉の昔から日本の文化や自然観と深く結びついた樹木で、「白砂青松」という言葉があるように、美しい海岸・浜の象徴として親しまれてきました。松はやせた土地や乾燥した土地にもいち早く侵入する先駆樹種です。中でもクロマツはアカマツに比べて、潮への耐性が強いことから、古くから海岸部に自生していたと考えられ、加えて江戸時代には各地で人工的に植樹されたといえます（ちなみに高級食材として知られるマツタケは主にアカマツ林から採れるそうです）。



「海見える・ぎゃらりい」と松を見上げる 写真2

クロマツなどで構成された海岸林は、防風・防砂・防潮など、私たちが海岸沿いで生活を送る上で欠かせない役割を担っています。実際、その背後には海岸林に守られるように多くの家々が立ち並び、多くの住民の方々が生活を送っていることが「ぎゃらりい」からも確認できます。もちろん近代的な道路、自動車、建築物も多く目に入りますが、こうした海－浜辺－海岸林－民家という景観の構造自体は、龍馬が生きた時代と大きな違いはないでしょう。

「ぎゃらりい」にお越しの際には、雄大な太平洋を眺めて壮大な気分になるとともに、周囲の大小さまざまなものに目を配ってみてください。それまでは知らなかった、あるいは気にしていなかった意外な発見や気づきがあるはずです。

安岡 達仁

入館状況

2024年6月20日現在

（1991年11月15日開館以来 32年220日）

◆入館者数 4,636,233人

■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来 699,473人

編集後記

最近、帯屋町など高知市街を歩いていると外国の方をよく目にします。記念館にもクルーズ船の団体のお客様を中心に、海外からいらっしゃった方々にもお立ち寄りいただいています。国内の方には、坂本龍馬は幕末を代表する人物として有名ですが、海外の方にとっては未知の人物なはず。そのような方々にも龍馬の生きざま・スピリットをお伝えできるよう、試行錯誤していきたくと思います（や）。

館だより「飛騰」第130号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2024（令和6）年7月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休

入館料 一般500円（企画展開催時700円）

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで